

# 『常陸国風土記』の漢語とそのヨミをめぐつて

—「天人」を中心として—

橋 本 雅 之

一

『常陸国風土記』（以下、当国風土記）は、その記述にあたりしばしば漢語を用いる。それは、伝承されてきた説話を語句のレベルで漢訳することだとも言える。そのような、表現された結果としての漢語を目の前にして我々がまず突き当たる問題は、それらを訓読すべきか音読すべきかということである。<sup>注一</sup>一つの考え方としては、ひとまずすべてを訓読する立場がある。しかしながら、当国風土記の本文と対峙してみるとよく分かるのだが、個々の文脈の中で見た場合、一定の日本語訓への直訳が困難であったり、訓読することによつて逆に漢語本来の意味から遠く離れてしまうような例がしばしば見受けられる。従つてすべてを訓読しようとするれば、いきおい意識的な内容にならざるを得ず、その結果として原文との間に微妙なズレが常につきまとう。

このようなズレや訓読の困難が生じるのは、当国風土記の文章の多くが純漢文という文体上の規制を受けて成り立っていることと無関係ではない。そもそも語句のレベルで漢訳する場合、もとの日本語表現と漢語とが完全に一致することは不可能に近い。漢語とその漢語の背後にある伝承との間には、述作された時点においてすでにある程度の乖離が生じていると言えるであろう。このような点から考えると、訓読にこだわらず音読を考えたほうがよいと思われるものも存在するのである。とは言ふものの、それならばどのような場合に訓読あるいは音読するのかという認定

『常陸国風土記』の漢語とそのヨミをめぐる

は、実は極めて難しい問題である。なぜならそもそもヨミ<sup>注二</sup>についての統一的原理が、当国風土記の中に存在しないと思われるからである。従って我々は、個々の問題において絶えず訓読と音読の間を揺れ続けざるを得ないのが現状である。

本稿は、このような困難さを充分に認識した上で、当国風土記の漢語のヨミについて考えてゆくことを目的とする。

二

ここで問題とするのは、行方郡の建借間命説話の中にみられる「天人」である。まずは、本文を引用してみよう。  
(以下の引用文は新編日本古典文学全集『風土記』、植垣節也校注による。〈 〉内は割注)。

古老曰、斯貴満垣宮大八洲所馭天皇之世、為<sub>レ</sub>平<sub>二</sub>東垂之荒賊<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>建借間命<sub>一</sub>。(即此那賀国造初祖)引<sub>二</sub>率軍士<sub>一</sub>、行略<sub>二</sub>凶猾<sub>一</sub>。頓<sub>二</sub>宿安婆之島<sub>一</sub>、遥<sub>二</sub>望海東之浦<sub>一</sub>。時烟所<sub>レ</sub>見、爰疑<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>人、建借間命、仰<sub>レ</sub>天誓曰、「若有<sub>二</sub>天人<sub>一</sub>之烟<sub>一</sub>者、来覆<sub>二</sub>我上<sub>一</sub>。若有<sub>二</sub>荒賊之烟<sub>一</sub>者、去靡<sub>二</sub>海中<sub>一</sub>」。時烟対<sub>レ</sub>海而流之。爰自知<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>凶賊<sub>一</sub>、即命<sub>二</sub>從衆<sub>一</sub>、褥食而渡。

(行方郡)

これは、この説話の前半部であり、崇神天皇の時代に建借間命を東国に派遣して荒賊を平定することを述べる。安婆の島で仮宿した建借間命の軍勢は、遙か東の浦から煙が立ち昇っているのを見る。そこで建借間命は、それが「天人」の煙か「荒賊」の煙であるかを、ウケヒによって判断しようとする場面である。ここの「天人」を問題とする。さて、これまでの諸注釈書を確認してゆくと、多くは「あめひと」もしくは「あまつびと」と訓読する。その中で、朝日古典全書と角川文庫にはルビが無い。おそらくこの両者は訓読・音読の判断を保留したものとみられる。語釈に関しては次のようになっている。

A 天孫系(朝廷方)の人

岩波日本古典文学大系（秋本吉郎氏）・新講（井上雄一郎氏）・角川文庫（小島環禮氏）・講談社学術文庫（秋本吉徳氏）・小学館新編日本古典文学全集（植垣節也氏）

B 天孫系（海人）↓東洋文庫（吉野裕氏）

東洋文庫が海人説を唱えるのは一応注意されるが、その根拠は示されていない。しかしながら東洋文庫も基本的には天孫を指すのであるから、大局的にみれば諸説一致して天孫系の人と考えることに違いはない。岩波の古典大系の頭注をみてみると「天皇の統治下にある人。大和朝廷の統治に服しない土着人（土蜘蛛）に対していう」とある。多くの注釈書が採用する「あめひと」という訓読は、「天人」が天孫系の人を指すという理解のもとに付けられた正訓であるともみてよいだろう。このようにしてみてゆくならば、この訓釈にはなんら問題がないようにも思える。しかしながら、果たして「天人」を「天孫」と考えることは妥当であろうか。

そこで、当国風土記に限らず逸文をも含めた古風土記全体を見渡してみると、そもそも「天孫」という例は、天日別命、奉<sub>レ</sub>勅、東入<sub>二</sub>数百里<sub>一</sub>、其邑有<sub>レ</sub>神、名曰<sub>二</sub>伊勢津彦<sub>一</sub>。天日別命、問曰、汝国献<sub>二</sub>於天孫哉<sub>一</sub>。（中略）于時、畏伏啓云、吾国悉献<sub>二</sub>於天孫<sub>一</sub>、吾不<sub>二</sub>敢居<sub>一</sub>矣。（伊勢国風土記逸文）

にみえるのみであり、「天孫」という認識そのものが古風土記の中で一般的ではない。当国風土記には「天孫」は一度も登場しない。従つて「天人」を「天孫」と理解することは、少なくとも当国風土記内部の記述からもたらされたのではない。だとするならば諸注釈書の説明はどこから生じてきたのかを考えると、これは明らかに『日本書紀』（以下、『紀』）における「天孫」の用例から導き出されたものと判断される。

語句の解釈において他の上代文献からその類例を傍証することは一般的には認められてよいと思うが問題はその妥当性であり、「天人」の解釈としてそれが相応しいか否かは、ひとえに『紀』の「天孫」の吟味にかかっている。そこで改めて『紀』における「天孫」を確認してゆこう。

『常陸国風土記』の漢語とそのヨミをめぐって

この語は卷一・二・三を中心として四十一例（卷二十四に一例ある）を数え、特に神代下に集中している。近年「紀」における「天孫」に関しては、神野志隆光氏によって作品論の立場から重要な見解が出された。神野志氏は、

而誓之曰、妾所<sub>レ</sub>娠、若非<sub>二</sub>天孫之胤<sub>一</sub>、必当<sub>二</sub>爰滅<sub>一</sub>。

（卷二、神代下、第九段）

などを中心に検討され、「天孫」は「天神」の裔たることをいうと論じられた。それは個々の文脈においては二二ギノミコトやホホデミノミコトをはじめ、

今当<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>汝庫裏<sub>一</sub>。宜取<sub>レ</sub>而献<sub>二</sub>之天孫<sub>一</sub>。

（卷三、神武即位前紀）

のように、神武天皇を指す場合もある。その点において「伊勢国風土記逸文」が神武天皇を「天孫」と称することは理解しうる。しかしながら、そのような理解を「天人」にまで及ぼすことができるかという点、それは別問題である。例えば当国風土記にはいくつかの降臨神話が確かに存在する。しかしその降臨の主体となる神は、

ア、古老曰、天地権興、草木言語之時、自<sub>レ</sub>天降来神、名称<sub>二</sub>普都大神<sub>一</sub>。巡<sub>二</sub>行葦原之中津国<sub>一</sub>、和<sub>二</sub>平山河荒梗之類<sub>一</sub>。大神化道已畢、心存<sub>レ</sub>帰<sub>レ</sub>天。即時、隨身器仗（俗曰、伊川乃甲・戈・楯・劍）及所<sub>レ</sub>執玉珪、悉皆脱履、留<sub>二</sub>置茲地<sub>一</sub>、即乘<sub>二</sub>白雲<sub>一</sub>、還<sub>二</sub>昇蒼天<sub>一</sub>。（信太郡）

イ、清濁得<sub>レ</sub>紓、天地草味已前、諸祖天神（俗云、賀味留弥・賀味留岐）会<sub>二</sub>集八百万神於高天之原時<sub>一</sub>、諸祖神告云、今我御孫命、光宅<sub>二</sub>葦原水穗之國<sub>一</sub>。自<sub>二</sub>高天原<sub>一</sub>降来大神、名称<sub>二</sub>香島天之大神<sub>一</sub>。天則号<sub>二</sub>曰香島之宮<sub>一</sub>、地則名<sub>二</sub>豐香嶋之宮<sub>一</sub>。（俗云、葦葦原水穗之國、所<sub>レ</sub>依將<sub>レ</sub>奉止詔留尔、荒振神等、又、石根・木立・草乃片葉辞語之、昼者狭蠅音声、夜者火光明国。此乎事向平定大御神止、天降供奉）（香島郡）

ウ、珠壳美万命、自<sub>レ</sub>天降時、為<sub>二</sub>織<sub>二</sub>御服<sub>一</sub>、從而降之神、名<sub>二</sub>綺日女命<sub>一</sub>、本、自<sub>二</sub>筑紫国日向<sub>一</sub>二所之峰、至<sub>二</sub>三野国引津根之丘<sub>一</sub>。（久慈郡）

エ、即在<sub>二</sub>天神<sub>一</sub>。名称<sub>二</sub>立速男命<sub>一</sub>。一名速経和氣命。本自<sub>レ</sub>天降、即坐<sub>二</sub>松沢松樹八俣之上<sub>一</sub>。（久慈郡）

にみられるように普都大神・香島天之大神・珠壳美万命・立速男命などである。このうち珠壳美万命については、諸注釈書ではニギノミコトを指すとするが、この見解にも疑問がある。なぜならば、この記事で語られる随神として降る綺日女命は『記』『紀』の天孫降臨神話に登場しない神であり、当国風土記のこの降臨神話は『記』『紀』の伝承とは異なるものである。そのような相違点についての顧慮なしに、いきなり『記』『紀』の記述を当国風土記の中に持ち込むのは無理であろうと考える。少なくとも現存記述に即して考えるならば、当国風土記にはニギノミコトやホホデミノミコトが登場しないと理解するのが妥当である。

以上のような検討を踏まえて、当面の問題に戻るならば、『紀』における「天孫」を傍証として、当国風土記の「天人」を解釈することは困難であると言わざるを得ない。かくして、当国風土記の「天人」については改めて考えてみなければならないのである。

### 三

「天人」の解釈は振り出しに戻ったわけであるが、そこで改めて上代文献における用例の検討から始めたい。この語は、当国風土記以外では、

ア、且見夫長髓彦稟性愎恨、不可教以天人之際、乃殺之帥其衆而歸順焉。

（『紀』卷三、神武即位前紀）

イ、属天皇我皇可牧万民之運、天人合応厥政惟新。

（『紀』卷二十五、大化二年三月）

ウ、高麗錦紐解き交はし 天人（あめひと）の妻問ふ夕ぞ 我も偲はむ

（『万葉集』、卷十・二〇九〇）

エ、天女云、凡天人之志、以信為本。

（丹後国風土記逸文）

の四例がある。ア・イは、漢語であるがこれらは、

亦欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言。

（『文選』卷四十一、司馬遷「報任少卿書」）

『常陸国風土記』の漢語とそのヨミをめぐつて

『常陸国風土記』の漢語とそのヨミをめぐって

奉春建策、留侯演成、天人合レ成、以レ発皇明。

〔文選〕卷一、班固「西都賦」

往者王莽作逆、漢祚中缺、天人致レ誅、六合相滅。

〔文選〕卷一、班固「東都賦」

などにみられるように「天と人」の意として理解される。漢籍の中ではこの意味で用いられることが多く、「天人」を考えてゆく上で重要である。しかし、当国風土記の「天人」がこれに該当しないことは明らかである。またウは、七夕歌であり、ここでの「天人」は彥星を指している。『万葉集』の七夕歌の中で彥星を「天人」と表現するのはこの一例だけである。『懷風藻』の七夕詩にこの語はない。また漢籍の七夕詩にも見かけない表現であり、極めて珍しい例である。従つてこの例は彥星を指すものとしても二〇九〇番歌にのみ適応できる限定的な表現なのである。一般的な意味における天上の人を言い表すものではないし、もちろん天孫を意味するものでもない。エは天上界の人を指した例であるが、これは羽衣型説話に属するものであり、ここでの「天人」についてもいわゆる天孫を表したものでないことは明らかであろう。以上の吟味からも理解されるように、他の上代文献に登場する「天人」のいずれもが、当国風土記の解釈に当てはまらない。

そこで改めて、建借間命説話の文脈をたどりながら考えてみよう。この語は、建借間命の発言の中に出てくるのであるが、その発言は、

若有二天人之烟一者、来覆我上。若有荒賊之烟者、去摩海中。

という対句として構成されており、ここでは「荒賊」の対になる概念を含む存在が「天人」なのである。そこで当国風土記における「荒賊」がいつたいどのような存在として意識されているのかという問題からまず検討する。建借間命説話の後半部では、「誓（ウケヒ）」の結果この煙が「荒賊」のものであると判明する。そしてその「荒賊」についてのやや詳しい記述が続いている。それによると、

於是、有国栖名曰夜尺斯・夜筑斯二人。自為首帥、掘穴造堡、常所居住。

とある。ここに記されたように二人の首領がいて、しかも穴居しているというのは、当国風土記における「荒賊」の典型的な姿であり、そのことについて茨城郡の記述には次のようにある。

在国巢、俗語、都知久母。又云夜都賀波岐。山之佐伯・野之佐伯。普置掘土窟、常居穴。(中略)狼性梟情、鼠窺狗盜。無被招慰、弥阻風俗也。

穴居している彼らの性情について当国風土記は「狼性梟情」と述べる。これについてはかつて述べたことがあるが、<sup>注四</sup>

臣以為「狼子野心」難「以恩納」。

(後漢書) 卷六五、段熲伝)

驥足方遐聘、狼心独未馴。

(楊炯、「和劉長史答十九兄」)

などにみられる「狼子野心」や「狼心」を背景に持つものであり、凶暴で教化しがたい人を譬えたものである。これらを踏まえて言うならば、当国風土記における「荒賊」とは、凶暴で協調性に欠ける人々を指していると理解できる。夙に山口昌男氏は当国風土記におけるこれらの存在について、秩序に対する「反秩序」として分類され得ることを指摘された。<sup>注五</sup>この見解を援用して考えるならば、建借間命説話における「荒賊」と「天人」とは、

天人(秩序)・荒賊(反秩序)

という対立する意味合いを持つものと理解できる。言い換えるならば、ここでの「天人」は、凶暴で教化しがたい人々とは異なり、従順で協調性をもつ人々を言うと考えられるのである。そのような秩序の側に立つ人々が常陸国に存在したことについては、倭武天皇の巡行の際に恭順の意を示さず殺された寸津毗古の亡き後、寸津毗売が、

引率姉妹、信竭心力、不避風雨、朝夕供奉。

(行方郡)

という行動を示したことからも証せられる。そして、このような例から考えるに、「天人」とは「信竭心力、不避風雨」「朝夕供奉」ような、従順で温和な存在と理解するのが最も妥当であると言えよう。つまりここでの「天人」とは、天孫の系列に属するといったような系譜的なつながりや、神話的背景を持つものではなく、「荒賊」に対立する

社会的な人間存在や人間集団を指していると考えらるべきなのである。従つて用例についてもそのような方面の検索をしてゆくべきであろう。そこで、そのような意味として相応しい例を漢籍に求めるならば、

脩時貢職、入觀天人。

〔文選〕卷二十、「晋武帝華林園集詩」庾貞

榮子以天人之大宝、悦子以縦性之至娛。

〔文選〕卷三五、「七命」張協

などが参考となる。第一例めの「天人」は具体的には晋の武帝を指すものであるが、李善注が「莊子曰、皆原於一、不離於宗、謂之天人」とするように、老莊思想の中で説かれる語を用いたものである。さてその老莊思想における「天人」とは、

夫復謂不醜、而忘人。忘人、因以爲天人矣。

〔莊子〕庚桑楚第二三「天人説」

というように説明される。この記述は、受刑者が大屈辱を忘れることによつて人の世を忘れるということを例としながら、人の世のことを忘れたものが、自然な調和を保つ「天人」であるとするのであり、そのような「天人」とは、

内直者、與天爲徒。與天爲徒者、知天子之與己、皆天之所子。

〔莊子〕人間世第四

不離於宗、謂之天人。

〔莊子〕天下第三三

とあるように、内に心を正しく保ち天の仲間となる者であり、天の道と不離一体である人を言う。自然な調和を保つことや、あるいは内に心を正しく保つと説明される点、当国風土記の「天人」と完全に一致するものではないものの、極めて近いところがあり、このような視点から接近することによつて文脈の中の意味、すなわち秩序を保ち従順な人々という理解に到達すると思うのである。しかしながら、はじめにも述べたように、ここにはやはり乖離があり、当該例が「莊子」の例と完全に一致するものでないことには、充分に配慮する必要がある。

以上のことを踏まえて、建借間命説話における「天人」は音読すべきか訓読すべきかに戻るのである。『万葉集』の例でも明らかに「あめひと」は、実はそれほど一般的な表現ではないのである。従つて、そもそも当国風土



記においては訓読を想定していなかった可能性が高い。本稿としてはひとまず音読説を採る。しかしながら、「荒賊」との対句関係を重視し、その訓読「あらぶるにしももの」（新治郡の語注による付訓）に対応する訓読として、「あめひと」も排除できないことを付け加えておかねばなるまい。

#### 四

近年出版された小学館新編日本古典文学大系『日本書紀』①の解説の中で、小島憲之氏は『紀』の訓読文について、音訓両用を加えた訓読文も一つの方法であるという見解を述べられた。それは古風土記を考える際にも貴重な教えである。古風土記のヨミに関する問題は、かつて小島憲之氏が「風土記の述作」<sup>注七</sup>において示された訓詁の方法が発点であり終着点である。訓詁の教えを仰げば、懐いは尽きることがない。

#### 注

- 一、拙稿「常陸国風土記注釈（一）」（『風土記研究』十九号所収、一九九四年十二月）。
- 二、本稿では、選択可能な訓読・音読の両者を包含して「ヨミ」という。
- 三、神野志隆光氏「古代天皇神話論」（若草書房、一九九九年十二月）。
- 四、拙稿「常陸国風土記注釈（四）」（『風土記研究』二二号所収、一九九六年十一月）。
- 五、山口昌男氏「文化と両義性」（岩波書店、一九七五年五月）。
- 六、訓釈については全釈漢文大系『莊子上下』（集英社刊）による。
- 七、小島憲之氏『上代日本文学与中国文学 上』（塙書房刊、一九六二年九月）。